

英国南部旅行(1999)

その3: ロンドン塔など

4. ロンドン市内(ロンドン塔など)

7月21日(水)

以前ロンドン訪問したとき、バッキンガム宮殿、大英博物館、グリーンパーク、ビッグベンなどは時間をかけて見物したので今回は午前中にロンドン塔を訪れた。夏目漱石が倫敦等塔(1905)で「倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。」と述べているが、旅行者の誰もが必ず訪れる場所のようである。塔と言うよりは城あるいは牢獄と言う構造である。しかし、小池滋の「世界の都市の物語 - ロンドン」によれば、11世紀頃、ウイリアム征服王が築いた要塞であって、外敵の進入からロンドンを守るというのが建前上の目的で、本音は国王に反逆する不逞の輩は、直ちにここへ放り込んで処刑するぞというデモンストレーションであったと言う。すなわち、英国史上、権力の狭間で犠牲になった多くの人々の怨みが宿っている場所であると共に、中世にはイングランドの王や女王が実際に生活した場所でもあるという奇妙な場所である。



この写真は案内パンフレットに掲載されていたロンドン塔の鳥瞰図である。

みどころは(1) No.40のウォータールー・ブロック、クラウン・ジュエル。銀行の金庫の部屋のような分厚い扉が出入り口のあり、部屋の中には女王をはじめ王室の人々が実際

に身に着ける財宝が展示されている。(2) No.43 のホワイト・タワーはウィリアム征服王



の治世に建てられたロンドン塔の長い歴史の出発点である。現在は王の武具と拷問用器具が展示されている。(3) No.35 のトレーターズ・ゲートは、数多くの有名な囚人がここでの処刑のためにくぐった門である。(4) カラスはロンドン塔名物の一つ。伝説によれば、カラスがロンドン塔を去ると、英国の王室も終焉を迎える、というお告げを受けたチャールズ II 世が一定数のカラスを飼うことを決めたと言われている。カラスと人間との係りは面白い。カラスは聖書にも出てくるし、日本書紀にも出てくる。サッカー連盟のシンボルになっていたり、都会ではカラスに悩まされている。

左の写真はウォータールー・ブロック、下の写真はクイーンズ・ハウス(No.28)である。

ロンドン塔見学後、地下鉄で、市の中心(ピカデリー・サーカス)へ戻り、三越で昼食をとった。幕の内弁当を注文したが円高の影響で非常に安かったという記憶がある。食後、ピカデリーにあるフォートナム・メイソン(Fortnum & Mason)、リージェント通にあるスコッチ・ハウス(Scotch House)、アクアスキュー



タム(Aquascutum)、リバティ(Liberty)、ローラ・アッシュレイ(Laura Ashley)に立ち寄った。アクアスキュータムは火災事故があり一部修理中であった。一旦地下鉄でホテルに戻り、一休みした後、翌日からの英国南部めぐりのために、マーブル・アーチのハーツの営業所へ車を借りに行った。運転に慣れていないので、万一の事故に備えて、保険は全部カバーするように掛けた。所定の手続きを終わり、車のキーをもらい車庫に行き、車を動かそうとしたが、バックの仕方がわからず、車が少しずつ前に進んでしまい動きが取れなくなった。仕方なく、フロントへ戻り助けを求め、担当者に来てもらいチェンジの入れ方を教えてもらい漸く運転可能になった。実に、心細いスタートとなった。普通、車庫の出口では傷などのチェックがあるが、保険を全部かけているので、フリーパスであった。